

『大般涅槃經集解』における僧宗の教判思想

菅 野 博 史

本稿は、僧宗（四三八―四九六）の教判思想を考察することを目標とする。『集解』は『南本涅槃經』を二千八百六十四の經文に分節しているが、僧宗の注は千百四十五箇所に採録されており、僧亮に次いで第二位を占めている。さて、僧宗における最も詳しい教判思想が見られるのは、僧亮の場合と同様、聖行品の五味の譬喩に對する次の注である。

如從牛出乳者、仏説小乘四諦法輪。此是成仏十二年中説也。從乳出酪者、謂十二年後説三乘通教。大品經是也。酪出生蘇者、如思益維摩抑挫二乘稱揚菩薩也。從生蘇出熟者、説法花破無三因果也。今此經明仏性常住窮理尽性、如醍醐也。（大正三七・四九三上―中。以下『集解』からの引用は頁段のみを記す）

これによれば、十二年間にわたる小乗の四諦法輪、大品般若經の三乘通教、維摩經などの「二乗を抑挫して菩薩を稱揚する」教え、法華經の「三因果を破無する」教え、涅槃經の「仏性常住にして理を窮め性を尽くす」教え、の五段階に分類している。これは、吉蔵が『三論玄義』において紹介する

慧觀の五時教判（三乘別教、三乘通教、抑揚教、同歸教、常住教）とかなり類似した考えである。実は、慧觀の五時教判はもつと後代の成立であろうと推定されており、その成立の歴史を考える上で、『集解』は第一次資料として重要な価値を持つ。そこで、僧宗と慧觀の五時教判を比較してみよう。慧觀の三乘別教は四諦、十二因縁、六度を包含しているが、僧宗においては四諦のみが取り出されている点が両者相違する。三乘通教については、僧宗においてすでに確立している点が注目される（僧亮には見られなかった）。抑揚教については、僧宗においてその用語の成立を確認できないが、「抑挫二乘稱揚菩薩」という表現は抑揚教と内容的には十分な対応を示していると言えよう。同歸教については、梵行品の「三乗之法説言一乘。一乗之法隨宜説三。」（大正二・七〇七下）に對する注に「三説一者、破異三之惑、説同歸之教。一説三者、昔日方便隨宜之教也。」（五〇四下）とあるのが注目される。常住教については、僧宗においてその用語の成立を確認できないが、か

わって「常教既興、知昔所行未為理極。」（四〇六下）などと「常教」という概念が見られる。

以上の五段階の教えが最も詳細な分類であるが、それ以外の教えが提示されることがある。それは、「昔教亦有深淺。如十善五戒是淺、四諦十二緣是深也。」（四二九上）とあるように、十善、五戒、四諦、十二緣である。そのなかで、四諦は第一段階の「小乘四諦法輪」であるから除くと、十善、五戒、十二緣が新しく挙げられていることになる。一般に、十善は天乘、五戒は人乘、十二緣は緣覺乘とされるが、これらを積尊の教化のなかにどのように位置づけるかについては、僧宗は明言していない。慧觀の五時教判は、人乘、天乘について言及せず、淨影寺慧遠の『大乘義章』教述義に紹介される劉虬の五時教判が第一に人天教を挙げていることを思うと、僧宗が人乘、天乘に対応する五戒、十善を視野に入れている点だけでも注意を要する。「化主説人天因果」（四八一上）「明昔所以須説五乘之教也。」（五一四中）という注も人乘、天乘を意識していると言えよう。

また、華嚴經の位置づけについてはどうであろうか。「從初鹿苑、迄至今日、隨能生解、皆為人説。」（三八六下）とあるように、華嚴經はまったく視野に入っておらず、また、「于時正在三七日思惟、知衆生有從化之理、願得遂也。」（四〇八中）とあるのも、必ずしも、華嚴經との関係は明らかではない。しか

し、一方「昔七處八會、説華嚴方広。」（四一五下）と述べられており、華嚴經の説法に言及している。ただし、華嚴經を「頓教」とするような位置づけはまったく見られない。

三乗の教えに対する評価は、菩薩品の「世若無仏、非無二乘得二涅槃。迦葉復言、是義云何。仏言、無量無辺阿僧祇劫乃有一仏出現於世、開示三乗。」（大正二・六六四中）に対する注に見られる。すなわち「若世間都無作仏理者、非無二乘得二涅槃。理既不爾。故知二乘權設小果。何得同仏耶。無量劫乃有仏出、釈上句也。謂円解難固、常倒易生。無善感仏、不得恒現。善機希有。所以時一出世、背化失機、動經劫數。云何説大耶。致教唯以三乗級引。故知小果權施、而非実也。」（四七二中）とある。ここでは、二乗の得る涅槃ニ小果は仏の涅槃とは同じものではなく、大乘を説くことのできない段階において仮に設けられたもので、真実ではないことが指摘されている。

法華經は第四段階に位置づけられているが、僧宗が着目した思想は、一仏乘による二乗の授記作仏である。法華經では、二乗はもはや二乗ではなく菩薩へと転換するのである。

たとえば「自法華曰來、皆得稱為菩薩。若未爾之前、不得稱也。」（三八六中）は、序品の「一切皆是仏之真子」（大正二・六〇五上）に対する注であるが、法華經の二乗授記によって、二乗が菩薩となつてはじめてすべてのものが「仏之真子」と呼ぶことができることを意味しているのである。また「若疑二乗

為有為無、法華諸經已能除之。」(五一六上)も同様である。⁽¹⁾

次に、多くの經教の相互關係についてはどのように考えられていたのか。「雖復十二部中理味有異、然同一仏説也。」(四一八上)とあるように、すべて仏説であることが指摘されているが、やはり「根有利鈍、教有淺深。」(四二四中)とあるように、教えの淺深の差を説いている。そして、涅槃經以前の教えは淺く、涅槃經は深い教えとされる。すなわち「此即第一明教異。謂昔淺而今深也。」(四九二上)と。これらの資料は、釈尊の説法を淺い教えから深い教えへと展開すると見ることを示しているわけではないが、僧宗も僧亮と同様に、そのように考えていたと推定してもよいであろう。僧宗が涅槃經を最高の經典と考へていたことは、「此經深隱、始是窮理也。」(四五九上)「經体所明、文理円備。除惑滅罪、功勝余經。」(四七七中)「当知衆經之勝也。」(五〇八上)「既教円理滿、能滅惡生善。力用弥曠、勝於余典。」(五四二上)などの注に明らかである。

では、涅槃經が最も深い教えとされる理由については、どのように考へられていたのか。經題の「大般涅槃經」の「大」を解釈する經序のなかで、次ように述べられている。

此累尽之都名、万善之極称也。大者、一謂教大。二謂理大。何者、始於鹿園、訖至法華、并因果未滿、明境行不周。所以為小。此經円備。所以称大。昔三乘涅槃、非実究竟。是道理中小。今明法身般若在乎衆累之外。所以称大。(三七八中)

『大般涅槃經集解』における僧宗の教判思想(菅野)

これによれば、因、果、境、行を明かすことが十分かどうかで涅槃經とそれ以前の經を区別していることがわかる。因、果、境、行の内容については、『集解』全体を参照しなければならず、ここで詳しく論じることとはできないので、簡単に記す。長寿品の迦葉菩薩の発した三十四の問い(大正二・六一九中—六二〇上参照)について、「然問答大旨、論因說果、明境并行。……第一有十三問、明常住因果。次有十九問、歎經功能。次有一問、明依(經)生行。次有一問、明所照境。」(四二二上)とあるように因、果、境、行の視点を分類に利用している。「云何得長壽金剛不壞身。復以何因緣得大堅固力。」(大正二・六一九中)に對する僧宗の注、「向問般若、此問法身。」(四二二下)「上句已問果。此下句問因也。下文答以護法為因也。」(前同)から、「果」は法身、般若を指すことがわかり、「因」は護法を指す(「以能護持正法因緣故得成就是金剛身。」大正二・六二三中)ことがわかる。「境」については、「行之所生、必由乎境。境中之妙、不過仏性。」(四一五上)「境中之妙、不過仏性。說此真境、生其下品聞慧。」(四四七下)「境中之妙、唯仏性。」(五四二上)「因果仏性之境」(前同)などの注から仏性を指すことがわかる。「行」については、聖行品冒頭の注「從此已下、明依經造行終期極果。即答前三十三問也。」(四七七中)から、聖行品以下に説かれる修行を指すことがわかる。ここでは、因、果、境、行のおおよその意味を記すことしかできないが、この四

つのなかでは「經之宗要、其唯因果。」（四二四下）とあるように「因果」が重要であるが、なかでも「此經大要、以常果為宗。」（四二二上）「經旨意不在因。但以果為宗。」（四一三上）とあるように「果」が最も重視される。では、涅槃經の重要な思想である「仏性」は「境」として位置づけられるだけで、最も重視される「果」と、どのような関係を持つのか。これについては、ここでは、「仏性通因果也。如來謂果地人也。」（五三二上）「因果仏性中道」（六〇五中）とあるように、仏性が因果に通じる概念であることを注意しておくにとどめたい。

これまで述べてきたように、僧宗は涅槃經を最高視しているが、彼は涅槃經以前の教えと涅槃經の教えとを指し示す概念として、「偏教」と「円教」を対にして用いる。このことは、僧亮においても見られたことであるが、僧宗においては一層頻繁に「偏教」「円教」が用いられる。今、「偏教」と「円教」を対にして用いる例を検索すると、「金剛宝藏無缺者、此円教所明円果涅槃、備一切德、不同孤滅解脱。猶如宝器蔵也。將辨異昔偏教。」（四二五中）「第三明雖失本解、善力所感、聖則出世、説偏教也。第四明常機始發為説円教。」（四五一中）（向拳譬以明円教。今拳毒譬以顯偏教。」（四五五下）「若常病者、為説偏教。若断病者、為説円教。」（四五九下）「偏教以三心滅處為滅。円教以常住之体絶衆相為滅也。」（四八〇上）が挙げられる。また、「円教」と関連して、しばしば「円」のつく熟語を用いる点が特徴的であ

る。たとえば「円解」（四〇六中、四一五上、四五一中、四五一下、四五二上、四七二中、四九三上）「円極」（四〇〇下、四七三下）「円果」（四〇二下、四二〇上、四八〇上）「円徳」（四〇二中）「円体」（四〇二上、四二二中）「円理」（四六六上）である。

次に、さまざまな教えの存在する理由について、僧宗は衆生の機根との関連で「一道者、此明如來隨根機故致教不同。」（四八五下）と述べている。⁵⁵ このことは、道生⁵⁶においてすでに示きり示されていた考えであるが、僧宗はこの「機」と「教」との対応関係をしっかりと踏まえて、「常教」すなわち涅槃經の説かれるべき機根を「常機」と表現している。たとえば、「何者、以昔常機未至、不得説常。」（四三三上）「常機欲發、應為菩薩。」（四四九中）「第四明常機始發為説円教。」（四五一中）「今常機且發、解釈仏果以為常。」（四五二中）である。

以上、僧宗の教判思想を考察してきた。聖行品の五味の譬喩に基づいて、釈尊一代の説法を五段階に分類する教判が見られたので、いわゆる慧観の五時教判との用語の類似性を指摘し、あわせて若干の相違点を明らかにした。また、人天乗の存在、華嚴經の位置づけ、昔教における二乗の涅槃の評価、法華經の思想への関心についても論及した。次に、僧宗においては、涅槃經が最高の教えと位置づけられるのであるが、その理由を常住の「果」を明かす点に求めた。さらに昔教と涅槃經の区別を偏教、円教の対概念によって示す用例を

示し、それに関連して、僧宗の好んで用いる「円」のつく多くの概念を紹介した。最後に、教の多様性の根拠を衆生の機根に求める思惟に基づいて、僧宗が涅槃經を説くべき対象として「常機」を取り挙げていることを指摘した。

1 拙稿『大般涅槃經集解』における僧亮の教判思想」(『印仏研』三五—、昭和六十一年十二月) 参照。

2 大正一二・六九〇下—上参照。

3 次に詳しい注に「如来初開四諦、但言是苦是集。未明苦集不生。及般若之教、始顯不生。爰至法華、苦集之相猶止三界。今日所明……」(四一三下)がある。

4 次下に出般若者、一乘実慧般若也。從般若出大涅槃者、即今教也。又一解云、此經文小誤。般若應為第三。方等應在第四也。」(四九三中) という注目すべき注があるが、本論では考察しない。

5 『集解』には法蓮、敬遺、慧朗などの僧宗注に対する注釈をしばしば載せているが、「敬遺記僧宗曰」として「自鹿苑至靈鷲、四時次第、極云復倍上数。自有偏方別教。如大雲勝鬘之流。此為上根者耳。今日開宗顯常、正為下根。故有次第也。」(三九一中)と述べている。勝鬘經などを「偏方別教」と規定している点、重要である。吉蔵が『法華玄論』卷第三において、「後人更加其一、復有無方教也。」(大正三四・三八二下)と述べているのと大いに関係があるであろう。但し、僧宗自身は勝鬘經を三回(四一七中、四八六中、五四九上)引用しているが、偏方別教については全く言及していない。

6 大正四五・五中参照。

7 その他の用例。「終聞常教、皆有受義。」(四〇八下)「今常教既興、一切悉斷。」(四二八中)「修行万行、必須円解常教。」(四七〇中)

8 大正四四・四六五上参照。

『大般涅槃經集解』における僧宗の教判思想(菅野)

9 僧亮も「楊葉譬人天乘四果。」(五一四下)とあるように、人天乘について言及している。

10 同じ箇所、明駿の注「法華之日、已無声聞。況在此席。豈更別有菩薩耶。」(三八七上)は理解しやす。

11 僧宗は法華經の二乗授記についての『涅槃經』の記述、すなわち、菩薩品の「如法花中八千声聞得受記別成大果実。」(大正一二・六六一中)に対しても、「如法華中八十声聞者、誤也。彼經云、八千声聞也。」(四六九下)と注している。僧宗の見た涅槃經のテキストには誤字があったようである。

12 このこと同じように、法華經までの經と涅槃經とを比較する視点で書かれた注に「自鹿苑至平法華、所說階級大有不同。唯此教円備。將明常住妙因、必資中道觀照。」(四四五下)がある。

13 「境有深淺、故教有偏円。」(四一三上—中)「夫教有偏円、由機有次第。」(四一三下)を参照。

14 その他、「偏教」の語は、四〇六下、四〇七下、四〇八下、四三三上、四四四下、四五〇上、四五〇中、四五二上、四五二下、四五九上、四六五下、四七一上、五〇四下、五六五下に出るまた、「円教」の語は、四一四中、四五〇中、四五五中、四五六上、四五八下に出る。これによって、僧宗が「偏教」「円教」の語をいかに多用したかがわかる。

15 これに関連する思想、用語についての注として、「必是大士、審見機縁。」(四二四下)「如来致教、消息根機。」(四二七上)「亦云、消息物情。」(四二九上)「善照機宜、動必有益也。」(四九九下)「正以善巧方便、应衆生根、令悟悟道。」(五五〇下)などを参照。

16 拙稿『竺道生における機と感應について』(『印仏研』三二—、昭和五十八年十二月) 参照。

ハキーワード 僧宗、五時教判、偏教、円教

(創価大学専任講師)